

# パーソナリティ・意見・態度

藤 永 保

## I. パーソナリティ<sup>1)</sup> 理論

パーソナリティ、あるいは人格、性格の研究は、はなはだ広範囲にわたっている。通常、パーソナリティの研究と呼ばれているものを具体的に考えれば、この事情ははっきりする。たとえば、インヴェントリーといわれる質問紙を与えて、その回答の様相からある個人の性格を探ろうとするならば、それは、意識構造あるいは態度構造の分析というに近い。これに対し、臨床的な診断の場に、ある人をおいて、そこからえられるさまざまな反応を分析し解釈して、その人についての結論に到達するとすれば、これもまたパーソナリティの研究といえる。しかし、そこで採られる手法も評定的方式も、両者には大きな隔りがある。また、人間の性格をその表出の様相によって判定しようとするならば、たとえば、表情その他の表出運動の研究も、むしろパーソナリティ研究の範囲に入るであろう。人間のもつ肉体的能力や運動能力もその人の適応性に影響すると考えるなら、体力の測定もまたパーソナリティ研究といえないこともない。あるいは、個人差というものが反応の様式に由来するだけではなく、そもそも外界を認知するときの様式の差にもとづいているのだと考えていけば、認知様式の研究は個人差の研究であり、パーソナリティの研究に通じる。

上にあげたいいくつかの例は、異なる側面を強調するように選ばれているので、作為的なきらいを免れないが、パーソナリティ研究の混沌たる状況をうかがうことはできるのである。少くとも、たとえば、知覚とか学習とか呼ばれる心理学の研究領域に較べれば、その守備範囲ははなはだ広大であり、その研究方法は茫漠たることは争えない。

それならば、なぜ、そのような事情が、導かれるのであろうか。そのためには、しばらく

---

1) パーソナリティ personality は、ふつう「人格」と訳されることが多い。しかし、本文中でもふれるように、この訳語は必ずしも適切とはいえない。日本語のもつニュアンスからみて、むしろ「性格」という用語をあてるべきであろう。しかし、不幸にして、personality に先じて輸入された character という語に「性格」がわりあてられていたために、やむなく「人格」が使われたのであろう。実際には、人格も性格もかなり相互に混用されてはいるが、ここでは、誤解をさけるために、パーソナリティという用語を用いておく。

く、パーソナリティ研究の起源と、その成立の背景とを探ってみなければならない。19世紀の心理学の主流である実験心理学が、英国経験論の哲学的伝統と、当時ようやく新興科学としての市民権を獲得した感覚生理学の、双方の嫡子として生まれたのに対して、パーソナリティ理論は異なる源流から発している。実験心理学が、実践的関心よりも、むしろ理論的課題の下に、あるいは方法論的な要請に左右されて、その問題領域を定めたのに対して、パーソナリティ理論はむしろ臨床医学や精神医学と深く結びついていた。実験心理学の開祖である W. Wundt や W. James が、何れも感覚生理学という基礎的教養を受け、生理学教室内に心理学の実験室を創設し、後年はむしろ哲学者として盛名をはせた事情は、まことに典型的である。当時、「感覚」なる用語は必ずしも生理学者の専売にかかるとはではなく、むしろ、哲学固有の問題とも、哲学と生理学との境界領域であるともみなされていた。それは、我々の日常経験を分析して、もはやこれ以上はさかのぼりえないという究極的要素を意味している。このような要素的経験をなぜ考えねばならないかは、認識論上の問題として定立されたのに対して、感覚の性質、状態、あるいは測定法などは生理学——心理学的な問題となる。<sup>2)</sup> こうして、哲学と感覚生理学との必然的な結びつきが生れ、その所産が実験心理学であったともみなされるのである。

これに対して、パーソナリティ理論の始祖である、S. Freud, C. G. Jung, W. McDougall らは、何れも精神医学の出身者であり、また、臨床的な実践に従事した。むしろ、完成した体系としてのフロイディズムのなかには、多少とも認識論的な主張がないとはいえないが、それは所産であって出発点ではない。それらは、迂遠な理論的課題には関心をもっていなかった。

さらに重要な特色は、実験心理学が、実験室のなかに閉じこめられ極めて特殊な状況下におかれた人間の、局所的な反応に興味をもったのに対して、パーソナリティの研究者は常に現実の生きた人間像そのものに関心を抱いていた点であろう。実験心理学者は、当時の自然科学の万能的方法論であった「分析と総合」の原則を無条件に採用しており、その

---

2) 英国経験論の主流は、有名なタブラ・ラサ説をとり、心は単純な経験の集積によって形づくられるとする。そうして、観念・感情などの概念と感覚との間には、それほど明確な区別はたてられていなかった。あるいは、極めて単純な経験が感覚であり、それらが連合によって結びつくとき観念が生まれるという、連合主義が主張された。

さらに、経験論は大陸にわたってより極端な感覚主義を生みだした。感覚主義は、我々の認識の究極的源泉は感覚にある、と主張する。こうして、感覚なる用語そのものが、すでに認識論上のある一定の立場を背景に担っているものであり、当時の感覚の研究は、常に多少とも感覚主義的な主張を含んでいると考えられる。たとえば、Fechner の精神物理学は、感覚を物理的実在に対応する一種の「もの」として扱うことによって、その測定法を定立しようとしているが、このような態度の底には感覚主義的な主張が潜んでいる。

結果、彼らが対象とした人間は無限に細分化されていつか極めて抽象的、観念的な存在と化してしまった。しかし、パーソナリティ研究家は、治療という至上の目標と結びついているために、このような抽象的人間を扱う訳にはいかない。彼らが、「分析」という言葉を使うとしても、それは障害の原因を探り、治療の体系をみいだす手段としての範囲に止まり、分析そのものが目的ではない。いいかえれば、実験という人工的状況下で、始めて抽出される特異な反応様式などは、その対象にはならなかった。また、分析されたさまざまな要素は、常に障害の原因・結果というからみあいの中でとらえられねばならないので、要素そのものが問題になるのではない。「人間全体」を理解するための、基礎的作業としての分析が問題なのである。

以上の基本的特色を一見しただけで、実験心理学とパーソナリティ理論とは、全く異なる性格を担って生まれたことが知られる。今日ですら、このような基本的相違が全く解消されたとはいえないであろう。(たとえば、H. Winthrop は、この対立を心理学における nomothetic approach と idiographic approach の対立として描きだし、その相違点を詳細に検討している。(1))そこから、Lindzey 及び Hall は、パーソナリティ理論やパーソナリティ研究のもっている基本的な特徴を、実験心理学とのコントラストの上で、いくつか指摘している。以下に、それを要約してみよう。(2)

第1に、パーソナリティ理論家は、実験心理学の発達史のなかで、常に異端者としての役割を果たしてきたといえる。この事情については、すでにのべたところであるから、もはや説明の必要はなかろう。

第2に、それは常に機能主義的 functional な方向をめざしてきた。いいかえれば、生活体の適応という主題に、最大の関心を払っている。だから、実験心理学者が、感覚を一種の「もの」とみなし、人間を要素の寄木細工なみに扱っていた時代に、フロイディズムのなかには画期的な構想が芽生えていた。つまり、神経症的な徴候は、感覚・運動上の器質的な障害ではなくて、患者が通常的手段によっては、適応できなくなったことを示すものであり、再適応あるいは過大な適応にすぎない。この事情を、Freud はすでに見破っていた。

いいかえれば、ある行動を説明しようとのぞむなら、常に「なぜ」そのような行動様式がとられるのか、そのうらに潜んでいる動機は何であるかを理解しなければならない。したがって、パーソナリティ理論家は、行動のメカニズムよりは、そのダイナミズムにより多くの関心をもつ。「いかに」よりは「なぜ」に、注意を払うのであり、目標とか動機づけの概念は、最も基本的である。これは、一般に「動的心理学 dynamic psychology」と呼ばれる学派の、中心的な特色であるが、その意味では、有力なパーソナリティ理論は、ほとんど動的心理学の範疇に属するといえよう。

第3に、実験心理学が個人差をもてあまし、これを誤差の一因とみるのに対して、パーソナリティ理論は個人差を排撃するものではなく、むしろ、これを必須のものとする事情をあげねばならない。実験心理学は、主として自然科学的な方法論に依拠し、一般法則の確立を主要な使命とみなしているから、その目的にとって不要な要素を、できるかぎり排除しようと試みる。個人差とは、実験心理学にとって、まことに厄介な必要悪にすぎなかった。今日でも、知覚、学習などと呼ばれる領域では、個体差という要因の処理のしかたが常に問題になっている。

これに対して、Freud や McDougall は、すでに早くから個人個人の持つ動機の差、ひいては適応手段の差を問題にしてきた。パーソナリティ研究のなかでは、個人差は一般法則とならんで、同様に重要なものであった。この問題については、後にまた詳述するとして、さし当りこの点の指摘に止めておこう。

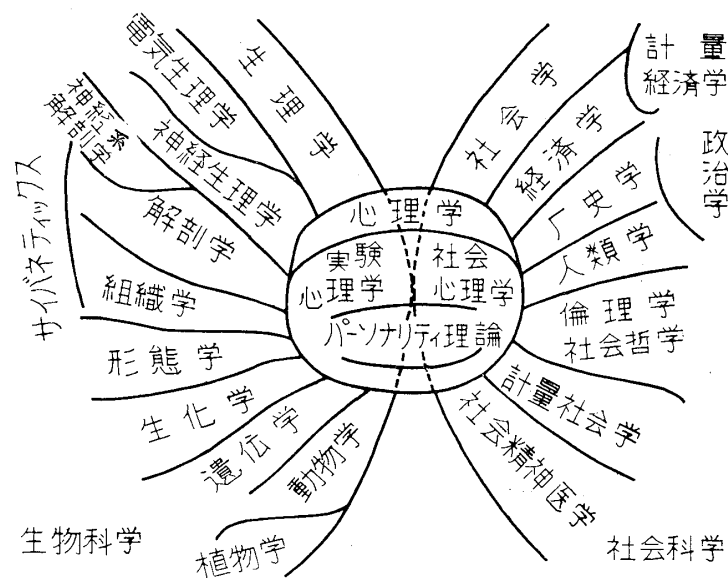
第4に、パーソナリティ理論では、実験心理学と異なり、「人間全体 whole person」の研究によって、始めて人間行動の理解が可能になると信じられている。これについても、その理由はすでにふれた通りであり、改めてくり返す必要はなかろう。ともかく、知覚や学習の研究が、局限された単一分野の研究に終り易いのに対して、パーソナリティ理論は、常に、「行動の一般理論 general theory of behaviour」としての性格をもっている点に注目しなければならない。どのような単一の行動も、パーソナリティ研究の枠内では、それが、当の人間全体にとってどのような意味をもっているか、という観点から問われねばならない。そのような意味がみ失われるならば、それはパーソナリティ研究にとっては問題にならない。しかしながら、よし知覚的事象であれ、あるいは学習的事象であれ、どんなに些細にみえることがらでも、その個人の適応上、意味のある事象であれば、パーソナリティ理論はそれに関心をもつ。したがってまた、どんな微細な行動をも、ある観点から、理解し説明する原則を確立しなければならないのである。たとえば、神経症の徴候 symptom の如きは、その典型であろう。

第5に、パーソナリティ理論は、統合的理論 integrative theory としての特性をもっている。上にのべたように、パーソナリティ理論が「行動の一般理論」としての性格をもつならば、それは、その限りで、心理学のあらゆる領域に関心を抱き、その研究結果に注目する。また、そこからえられた知見によって、自己の理論を修正し、その適用性を拡張しようとするのである。

パーソナリティ理論が統合的理論としての性格をもつという点について、H. J. Eysenck は興味ある事例をあげている。(3) すなわち、第二次大戦中に、夜盲症に陥った兵士たちを詳しく調べたところ、予期に反して生理学的障害に基づくケースは、案外少なかったとい

う。しかも、それ以外の事例では、不安の昂進その他の情動的障害を示すものが、大部分を占めていた。この結果は、単なる夜盲症の解明にも、純医学的なテスト以外に、さまざまな角度からの検討を要することを示し、特に、パーソナリティという巨視的次元からのアプローチが重要であることを示唆している。夜盲症は一例にすぎないが、おそらくは、他にも多数の事例があるのではなかろうか。こうして、パーソナリティ理論は、自らを豊富にするためだけではなく、他の分野での知見を十全たらしめるためにも、ますます統合理論としての性格を高めざるをえなくなるといえよう。

Eysenck は、心理学にいわゆる生物科学と社会科学とを媒介する位置づけを与えている。次図でいえば、左方は、生物系の諸科学を示し、さらに実験心理学はそれらの嫡出子として生物科学の隣接領域に位置づけられている。これに対して、右半分はいわゆる社会科学のカテゴリーに属し、社会心理学はそれに近接して定位されている。生理学的心理学——実験心理学と、社会心理学とは、このままではあらゆる点で異質化を免れないし、同じ心理学という名で呼ばれるには、余りにも両者間の落差は大きい。この分裂を補填し、失われんとする統合を回復するものは、パーソナリティ理論であるという。先の夜盲症の例にみるごとく、人間の問題は、一見いかに単純にみえようとも、さまざまな複雑な原因と条件をもち、さまざまな視角からの解明を要するからである。このような、さまざまなアプローチの会合する場が、すなわちパーソナリティ理論なのである。



もとより、それは一種の理想図にすぎないともみられる。あるいは、唯一の構図でありうるか否かさえ疑わしい。しかしながら、先にのべた如く、実験心理学とその他の心理学の領域との間に、基本的な性格の差異を認めるとすれば、こうした試みもさらに追究される

必要があるだろう。

ともかく、現在、パーソナリティ研究と呼ばれるものを一応現象的に整理してみれば、次のような種々の方向がみいだされる。すなわち、1) 臨床心理学あるいは異常心理学的見地からのアプローチ、この場合には、パーソナリティ理論は、徴候の意味や発生の機制を解明するための枠組という趣が強い。2) 社会心理学、あるいは文化人類学という互視的角度からのアプローチ、ここでは、パーソナリティの社会——文化的環境による形成面が重視される。3) パーソナリティを種々なる動機の体系として理解しようとする動的心理学の立場、これは1) 2) の視角と必然的な連関をもち、学習心理学の領域とも結びついている。4) 遺伝的要因を重視する類型学的立場、これは、ヨーロッパ的性格学説の特徴であり、「遺伝か環境か」が重要な設問となる。5) パーソナリティの要素分析をめざす特性論、これはテスト的方法に依拠し、個人差の解明という伝統的課題をも担っている。6) 認知や表出や思考様式に表われる個人の特性の研究、この分野は最近発展しつつあるもので、従来、知覚、情動、思考などと呼ばれた領域との境界領域ともみなされよう。

以上は、粗雑な概括にすぎない。これ以外にも種々の研究領域はあろうし、また別様の分類体系もあろう。あるいは、その内容に関しても、さらに詳しい解説が必要である。しかし、こうみてくると、いわゆるパーソナリティ研究が、心理学のほとんど主要な課題領域をおおっている事情は、看取されるであろう。そうして、上述してきたパーソナリティ研究——パーソナリティ理論の基本的性格も、やや具体的に把握されるであろう。

さて、態度 *attitude* とは、元来、実験心理学的な「構え *Einstellung*」の概念から発している。つまり、実験事態において、被験者に内在するある反応の傾性をさして構えと呼んだのであるが、これが態度と翻訳された後には、むしろ、社会心理学の領域での主要概念と化していった。現在では、社会的態度という形容詞を附した方が、はるかに分り易いし、社会心理学の専売にかかる概念ともみなされている。このような問題に対して、パーソナリティ理論が関心を抱くに至ったのも、また、象徴的といえよう。

パーソナリティ理論と態度研究との具体的な接点については、何れ後続の論文にのべる予定である。しかし、態度とは、一面、個体に内在する傾性を指し、他面では、その個体を取りまく社会的環境にもかかわっている。パーソナリティ理論は統合的理論として、さまざまな領域に好奇心を抱くのであるが、特に、態度の如き分野を追究する絶好の資格をもつといえるであろう。

## II. Personality と Character<sup>3)</sup>

以上でパーソナリティ研究の大まかな外延と、その共通の特徴についてのべてきた。しかしながら、パーソナリティなる語を厳密に定義しようと試みるならば、それは案外容易ではない。L. P. Thorpe は、「パーソナリティなる用語は、おそらく現代心理学におけるもっともあいまいな概念の一つであろう」とのべている。その理由は、パーソナリティ研究が必ずしも限られた独自の対象をめざすものではなくて、「行動の一般的・統合的理論」を求めようとする点にあるであろう。そうするとパーソナリティ理論家が何らかの定義を下そうとする場合、群盲象を評する趣きを免れ難くなってくるからである。したがって、どの定義もまた、他の論者からみれば一面的という非難を浴びることになる。おそらく、現代において最もよく使われるパーソナリティの定義は、G. W. Allport によるものであろう。彼は、パーソナリティを「精神・身体的システムをもつ個人内の動的体制であって、その個人の環境に対する彼独自の適応を決定するもの」としている。(4) これは、よく考えぬかれた定義ではある。しかしながら、ここでは、パーソナリティとは、まず何よりも、その個人の内的な資質を意味している点に注目しなければならない。

これに対して、たとえば、H. S. Sullivan は次のような定義をとる。パーソナリティとは「人間の生活を形づくる、反復生起する人間関係状況 interpersonal situations の比較的永続するパターン」である。(5) 人間は何かを夢想するときですら、決して完全に一人になることはない。夢想すらも、ある現実のあるいは仮説的な他者を相手どって行われている。このように考える Sullivan にとっては、我々の全ての行動は常に対人関係的状况の下で生起することになる。いいかえれば、我々は常に他者とかがわりあうことによって、行動するのである。パーソナリティとは、このような対人的行動のうち、比較的一貫した恒常な型づけを意味している。だから、パーソナリティは、社会的環境を前提するともいえる。もっとつっこんでいえば、パーソナリティなるものは、自分でもなければ他者でもなく、いわばその中間にあって両者を媒介するもの、ということになるろうか。こうなると、先にのべた Allport 流の個体に内在する資質といった定義は、全く意味をなさないことになるろう。

Allport 自身が、自己の立場を生物・身体的 bio-physical と称し、これに対して、もう一つの立場を生物・社会的 bio-social と呼んでいる。彼と Sullivan との相違は、た

---

3) 註1) にのべたように、personality は人格、character は性格と訳されるのがふつうであるが、しばしば混用されるのをさけられない。ここでは、論点を明確にするために、訳語を使用せず原語のままとしておく。

しかに、このような対立を含んでいる。先の Eysenck の図解に示されるように、パーソナリティ理論は、心理学を統合しその諸領域を媒介する位置にあるために、それ自身がさまざまなアプローチの角度を含み、それを統合するに悩んでいるともいえるだろう。主として左方から、パーソナリティ研究に接近しようとするならば、それは生物科学的な個体的な立場から、パーソナリティを基礎づけることになるだろうし、逆に、右側の社会科学的立場を出発点にとれば、個体的資質よりはむしろ、その社会的環境が重視されねばならないことになる。

パーソナリティ理論は、混沌たる視角をはらんでいる。しかし、概括的に整理するならば、上にのべた如くそこに二つの方向をみいだすことができる。このような交通整理を終わった後でなければ、実は、その定義を下すことも生産的ではない。いいかえれば、アプローチの視角によって、その用語体系も異なれば含意するところも相違を免れないのが、現状なのである。そうして、personality あるいは character なる原語そのものが、すでにこの対立をはらんでいる。スイスの心理学者 H. F. Ellenberger は、personality も character も、ともに仮面という語から発し転じて標識の意に使われるようになったが、しかし、両者の含蓄は異なることを指摘している。つまり、personality には、表面的な、移り変る特性といった意味があるのに対して、character は、本質的な不変的特徴を指している、という。このような指摘が正しいか否かは、原語に通じていない我々には分り難い。しかし、Ellenberger は続けてまた、次のようにいう。「アメリカ心理学の主流は、人間の personality の可塑性を信じ、それは生活史と社会的影響によって形づくられると考えている。ストレスへの反応とか、対人関係とかに重点がおかれてもいる。しかし、スイスでは、基本的性格構造 basic character structure の恒常性がより強く信じられ、社会的な要因よりも遺伝学とか体質的精神医学の方が重要だとみなされている。」

たしかに、character なる用語は、ヨーロッパの心理学者の愛用する言葉である。これに対して、第二次大戦前までは、アメリカでも personality と並んで character なる語が使われてはいたが、その後、次第に character は追放されて、今は personality が一手に用いられているようである。そこには、単に、言葉の上の問題ではなくて、むしろ、これと結びついた概念の内包上の問題があったと思われる。アメリカの学者は、character の含意に不満を感じ、彼らの抱く問題意識をより正当に依託しうる言葉として、personality を選んだのであろう。では、そのような含意の差とは何であろうか。

G. W. Allport は、Ellenberger と同じ書物の中で、アメリカとヨーロッパのパーソナリティ学説の本質的に異なる点について、何ヶ条かを指摘している。(7) 以下に、それを要約してみよう。



まづ第1に、両者のもっている「基礎假定 — 人間観の差」があげられねばならない。イギリス及びアメリカでは、アングロ・アメリカンの伝統的な哲学として経験論が根強く信奉されている。心は白紙であり、経験をまっぴら初めて形づくられるのである。こうして、その形づくられ方の法則をみだし、それを究明するための連合主義心理学が生まれた。連合主義は、I. P. Pavlov の条件反射学、Ch. Darwin の進化論、Freud の精神分析学などと結合してアメリカに渡り、さらに極端な形態をとって結実した。Allport によると、これが、行動主義の主張である。

行動主義の焦点は、ふつう、意識とか心などの主観的・個人的対象を心理学の世界から排除して、外的・客観的に観察可能な行動をもっておきかえたところにあるとみなされている。しかし、行動主義は、それ以外に、人間に対する強い要素観、機械観、環境優位の思想などを含んでいる。したがって「行動主義は、ごく僅かな例外を除いて、アメリカの全ての心理学者にとって、価値ある科学を建設するための唯一のモデルとみなされた。Watson は、なおアメリカに残存していた Titchner の内観主義や、McDougall の本能説を打破して、アメリカ心理学を、浅い、機械的な、魂のない、科学的な学問にしたてたのである。」

これに対して、旧大陸では、合理論・先験論の伝統が根強い。それは、人間性は生得的なものであり、環境的要素によって影響されないという人間観を含んでいる。

したがって、遺伝か環境かという問題に対して、アメリカでは、まづ環境形成という方向に重点がおかれたのに対して、ヨーロッパでは、体質とか生得的気質の概念が第一にとりあげられることになる。このような対立は、その底に、一種の人間観の対立を含んでいると考えられる。

第2に、「全体と部分の関係」について、見解が分かれてくる。ヨーロッパでは、人間の統一性・全体性 wholeness は、自明の原理であり、全ての学説に前提されているといってもよい。たとえば、W. Stern の personalism や形態心理学や K. Lewin の場理論などは、何れもこうした全体性を強調している。また、ヨーロッパ的性格学の一つの代表である成層説 stratification theory など、一見分析をこととするようにみえながら、実は全体性や統一性を解明するために分析が行われている。また、ヨーロッパ的性格学のもう一つの典型である類型学説は、さまざまな気質特徴の間に生得的な親和性と統一性があり、したがってあるタイプが生れながらに与えられるとみなしている。これは、全体観の最も明瞭な表現というべきであろう。

ところで、アメリカ的学説は、先にのべたように要素観が著しい。したがってまた、分析と総合という実験心理学的な手法が強くとり入れられている。たとえば、質問紙による

特性の研究とか、因子分析法によるパーソナリティの次元の決定などは、その好例であろう。そうして、このような要素の客観主義的な操作——たとえば、数量化——も、またその特色となる。これは、ヨーロッパ的な心理学が、人間を分析できないものとみなし、数量化を拒否して、むしろ、あるがままの全体を直観的に把握しようとする了解的手法をとるのと好対照をなしている。また、アメリカの心理学もゲシュタルト学派の影響を受けたために、以前に較べれば、全体性 wholeness を強調するようにはなったが、パーソナリティの統一性は、個体に内在するものではなく、社会文化的環境の恒常性に依存していると考えられる傾きが強い。

こうしてみると、アメリカではパーソナリティ研究と実験心理学との結び付きは、ヨーロッパに比してはるかに強いことが知られるであろう。

第3に、基本的な「価値観の差」があげられる。アメリカでは、オプティミズムや改良主義が著しいが、ヨーロッパでは逆に宿命論やペシミズムが伝統的である。Allport はいう。「アメリカの青年は努力さえすれば偉くなれると考えるが、ヨーロッパでは門閥や地位の力が人間の運命を決定するとみなされている。また、アメリカでは、富みかつ充実した生活が理想であるが、ヨーロッパの学生は自分の内的な世界の方がより大切であり、いろいろな外的困難にうちかって、自分の地位を守らねばならぬと感じている。」

このような、価値観の相違は、パーソナリティ理論の上にも、さまざまな、投影を与える。たとえば、Freud の初期の体系は極めてヨーロッパ的であり、イド id のもつ非合理的な無意識的な衝動が一方的に重視されている。また、C. G. Jung の説く無意識も、Freud と同じく非常に強大な本質的なものとして発想されている。意識という合理的な世界は、Jung にあっては、実は氷山の一角のごとく、無意識の一象面にすぎない。あるいは、実存主義に依拠する実存分析の立場では、人間の罪意識や非合理性が、本質的なものと考えられている。これは、カトリシズムの原罪の思想が、人格学説に賦与された所産ともみられる。したがって、この立場では、精神病や神経症は人間実存の一種の典型とみなされているのである。

ところで、アメリカでは、たとえば精神分析学が輸入されても、その非合理的な側面は次第に軽視されていく。その代りに、社会的・文化的な要因が一種の生産的な圧力 creative force として導入され、ネオ・フロイディズムの思想が生まれた。さらに、アメリカ的精神分析学は、動機、適応、ストレスへの反応といったことに重点をおき、動機を変容させるメカニズムとしての防衛機制などの構想に興味を抱き、あるいは、基本的動機を形成する幼児期の対人環境に重点をおく。そうして、無意識とか本能とか衝動とかの概念は次第に力を失い、動的心理学 dynamic psychology は、アメリカ的精神分析学の代

名詞とすら化しつつある。これに対して、ヨーロッパに定着した精神分析学は、依然として伝統的な深層心理学 Tiefenpsychologie の名で呼ばれているし、字義通りに、無意識とその象徴、あるいはその遺伝規定性などの問題に興味を抱いている。この例は、ある学説も、それが導入される社会の価値観——文化の型にしたがって、重点と視角を変え、次第に変容していくことを示す好例であろう。

また、アメリカ的な、心理療法の一つの典型は、C. Rogers のいわゆる非指示的療法 non-directive counseling であろう。これは、格別の技法をもたない点で実存分析と近似しているが、しかし、両者の基本的構想は全く別ものである。実存分析が本質的にペシミズムに立脚しているのに対して、非指示療法は、無限のオプティミズムに支えられている。それは、患者の内発的な向上性を無条件に信頼するのである。

また、ヨーロッパ的な類型学は、多くが精神病や神経症を人間の一種の典型とみなすところから出発する。しかし、アメリカでは、症候は過度の適応あるいは異常な適応にすぎない。

このようなパーソナリティ理論の背景に潜む価値観を精査してみれば、そこには、それぞれに伝統的な思想の系譜がみいだされるのである。

第4に、「社会的相互作用 social interaction の位置づけ」の問題がある。アメリカでは、W. James, J. Dewey, G. Mead らの社会的行動主義の伝統があり、環境への適応の一環として、社会的相互作用や対人的適応が重視される。そこから、内在的な資質や特性をもってパーソナリティを定義するよりも、対人交渉の型という客観的・外在的な規準をもって定義しようという考え方が生ずる。R. Sears のいう、パーソナリティとは、「社会的相互作用の型づけ modes of social interaction」とする定義や、先にあげた Sullivan の定義が派生してくるのである。

ところで、ヨーロッパ的見地からすれば、人間のある特徴はあくまで個人の属性であって、これを社会的交渉の型とみなすことは到底不可能である。ここに、やはり一種の断層がある。

第5に、方法論の差をあげねばならない。アングロ・アメリカンの心理学は、自然科学的、実証主義的、行動主義的、操作主義的である。分析と総合、実験装置の使用、結果の数量化、さまざまな数理的モデルの適用などのアメリカ的手法は、そこから生じてくる。

一方、ヨーロッパの性格学者は、始めから機械的な分析の方法に疑いの目を抱いている。たとえば、E. Kretschmer はいう。「観察者は、……巻尺や測径器などよりも、一層うまく対象に適合できる。とにかく、尺度と数によらなければ、『普遍的な』また『厳密な』結果がえられないなどと思い込むのは、非常な考え違いである。……数字だけでは

何も説明してくれない。……」(8)ここに端的に表明されているように、ヨーロッパの性格学者は、あるがままの全体を直観的に把握しようと望み、数や数理的モデルをあてにならないものとして拒否する。というよりは、数や数理的法則はそれ自体では何も語らないのであり、その基礎をなし、その論理を支える発想の方が大切なのである。したがって、ある個人の本質が何ものかに顕現され投影される現象学的 phenomenological な方法が尊重され、あるいは了解的手法がとられるのである。

以上、Allport のみごとな分析に依拠して、パーソナリティ理論における右派と左派との対立をスケッチしてきた。むろん、細部にこだわるならば、これ以外にもさまざまな相違はあろうし、同じアングロ・アメリカンのパーソナリティ理論の中でも、さまざまな対立は存在する。しかし、大まかな概括の域に止めるならば、この分析は鮮やかであり、パーソナリティ理論の性格を解明するものであろう。H. A. Murray は、Allport の説をうけて、同じ結論を承認し補強してもいる。たとえば、実存分析にみられるペシミズム——原罪意識は、心理学における倫理学説の唯一の直接的な反映を示すものだという。(9)たしかに、これは西欧的な思想の伝統にたつものである。

### III. 定 義 の 問 題

以上で、パーソナリティ理論における二つの潮流について論じてきた。ある意味では、冒頭にのべた実験心理学とパーソナリティ理論との対比が、姿を変えてそのままもちこられているともいえる。あるいは、Winthrop の指摘する、nomothetic approach 対、idiographic approach の差が、ここにも反映しているといえよう。いずれにしろ、パーソナリティ理論が行動の一般理論をめざし、全ての心理学的研究の会合する場であることを望むかぎり、このような対立はさけられない。

パーソナリティという語は、Thorpe の指摘するとおり、たしかに曖昧きわまる概念ではあるが、これもまたパーソナリティ研究の現状からみてやむをえないともいえる。そこには、さまざまな視角、発想、方法論、研究法などが流れこんでくるからである。のみならず、パーソナリティ研究のなかには、一般に心理学の禁句とされ、科学としての性格を脅かすものと信じられている価値観の、意識的・無意識的な流入をさけることができないのである。

たとえば、すでに Allport の言を借りて示したように、アメリカ的なマス・イデオロギーは「アメリカは地上唯一の自由の王国であり、人は才能と努力さえあれば、無限に立身できる」と信じている。こうした価値観は、「人間の心理学的研究」を示す personality

という概念の中に、しらずしらず反映してくるのである。あるいは、これと対照的な旧大陸のイデオロギーも character なる用語の中に、どうしても何らかの痕跡を止めることになる。

たとえば、McKinnon によると、character とは「パーソナリティの道徳的・倫理的側面」という意味で用いられるという。彼は、その他の character の語義を検討して、多かれ少なかれ上にあげたニュアンスをさけることはできないという。(10) (もし、このようであるならば、character は性格ではなく、人格と訳すべきものであったろう。)

Allport は、character とは、ある側面から評価された personality を示すものであり、personality とは、character からこのような価値観を拭いさった概念だという。

(したがってまた、personality はむしろ性格と訳す方が本意に近い。) あるいは、先にあげた Ellenberger の character は人間の奥深い本質を示すものだという主張も、実はここにつながっている。

しかし、ひるがえって考えるならば、パーソナリティ理論のみならず、全ての心理学の領域に、あるいは科学的研究に、価値観の介入をさけることはできないのである。多くの浅薄なる実験心理学者は、ひたすら価値観の幻影に脅え、懸命にその追跡から逃れようと試みているが、実はこのような考え方こそ、裏返しにされたある価値体系であることには気づいていない。この点について、H. Cantril は次のように指摘している。

「科学的客観性の可能性ないし必要性について、多くのことがいわれてきた。科学的方法によって規定されている規則に注意深くしたがっているなら、だれでも判断におけるいかなる個人的偏りも避けようと、多くの人は論じている。けれども、これは神話にすぎない。いかなる科学者も、みずから認めると否とにかかわらず、彼のなすいかなる解釈も価値判断であるとみなさざるをえないのである。……それは、科学者が最初に、現在の理解の不適切さを感じ、問題を提起するときに含まれる。それは、何がその問題を惹起しているのか考える過程において入りこむ。それは、変数の選択に際して入りこむ。それは、実験手続きの設計に入りこむ。そして最後に、データの解釈に入りこむ。……そこで科学の『客観性』とは、とり上げべき問題と、研究すべき変数と、実行すべき実験計画が決定したのちにおいて、実証研究の既定の規則が守られているということを意味しうるだけである。……」

パーソナリティ研究のなかに、ある価値観が反映されていることは、決して欠陥ではない。むしろ、科学主義の旗をふりかざして、みてみぬふりをするよりは、そのようなイデオロギーの流入を正當に承認する方が、はるかに望ましいのではなかろうか。ただし、この際、我々の警戒すべきことは、どのような理論といえども、ある種の偏りをもつこと、

あるいは出発点そのものがすでに異なることを意識して、可能な限り、それらの視角を相互に重複させることであろう。実証研究の本質とは、それらの対立をおおいにかくしたり、なくしたりすることではない。むしろ、異なる前提や公理系をいかにして正当に対決させる場を求めるかを、思案することなのである。

それはともかく、筆者はここで、personality や character の唯一妥当な定義を提出する意図はない。むしろ、ある概念に暗黙に含まれる前提や価値の体系を明らかにしようと努めるのである。パーソナリティ研究の現状では、万人を納得させる定義などは望むことができないと信ずるからである。そこには、多様な人間観が含まれるのが、むしろ当然であろう。それを、承認した上で、それらの前提条件のいくつかをさらに含みうるようなより上位の公理系を求めることが、パーソナリティ研究者の仕事であろう。そうしてみれば、personality と character との対立もそれをみわけるべき作業の第一歩とすれば実は光明でこそあれ、暗影ではない。

むろん、一がいにアメリカ的心理学といい、ヨーロッパ的性格学といっても、その中には各研究者によって、さまざまなニュアンスがありうる。次に、Lindzey 及び Hall による各パーソナリティ理論の次元別の分類表をかがけてみよう。表中、左欄はその理論の主唱者を示し、上段は、理論の中に含まれる次元あるいは特性である。H, M, L の記号は、そのような特色が高いか、中程度か、それとも薄いかを示している。(次頁)

この表をみると、そこには、さまざまなニュアンスが潜むことが知られる。しかし、にもかかわらず、最大公約数としての一致点を求めることもまた困難ではない。たとえば、すぐれてヨーロッパ的学説である、Jung や Kretschmer には、何れも学習とか社会文化的環境という要因が入ってこないし、逆に遺伝や生物学的規定性などの特色は著しい。逆に、全くアメリカ的な Sullivan や Murphy の理論には、その逆の様相がみられるであろう。

いま、大まかにまとめれば、personality なる概念は、役割や表層的特性を示し、動的契機を強調し、適応を目標とする。そうして社会・文化的環境による形成面を重視しているし、分析的手法を含意する。これに対して、character は、役柄や本質的特性を示し、極めて静止的であり、その不変性を強調する。適応とか動機よりは、ある個人の先天的に規定された個性・類型が主役をなす。そうして、全体的見地や直観的了解の手法がとられるのである。

なお、パーソナリティには、その他の様々な概念が附随している。たとえば、生得的な情動的特性を指す気質 temperament とか、気質をも含めて一切の遺伝的素質の総体を示す体質 constitution などがあり、他方には、性格の分析的特徴を示す特性 trait、状

# DIMENSIONAL COMPARISON OF THEORIES OF PERSONALITY

|                     | Purpose | Unconscious<br>Determinants | Reward | Contiguity | Learning<br>Process | Personality<br>Structure | Heredity | Early Develop-<br>mental Experience | Continuity of<br>Development | Organismic<br>Emphasis | Field Emphasis | Uniqueness | Psychological<br>Environment | Self Concept | Group Membership<br>Determinants | Biology | Social<br>Science | Multiplicity<br>of Motives |
|---------------------|---------|-----------------------------|--------|------------|---------------------|--------------------------|----------|-------------------------------------|------------------------------|------------------------|----------------|------------|------------------------------|--------------|----------------------------------|---------|-------------------|----------------------------|
| Freud               | H       | H                           | H      | M          | L                   | H                        | H        | H                                   | H                            | M                      | L              | M          | H                            | M            | L                                | H       | M                 | L                          |
| Jung                | H       | H                           | M      | L          | L                   | H                        | H        | M                                   | L                            | H                      | L              | M          | M                            | M            | L                                | H       | L                 | M                          |
| Adler               | H       | M                           | L      | L          | L                   | M                        | H        | H                                   | H                            | M                      | H              | M          | M                            | H            | H                                | M       | H                 | L                          |
| Horney              | H       | H                           | M      | L          | M                   | M                        | L        | M                                   | M                            | M                      | M              | M          | M                            | H            | H                                | L       | H                 | L                          |
| Fromm               | H       | M                           | M      | L          | M                   | M                        | M        | M                                   | M                            | M                      | M              | M          | M                            | M            | H                                | L       | H                 | L                          |
| Sullivan            | H       | M                           | M      | H          | M                   | M                        | M        | M                                   | H                            | H                      | H              | M          | H                            | H            | H                                | M       | H                 | M                          |
| Lewin               | H       | L                           | M      | L          | M                   | M                        | L        | L                                   | L                            | L                      | H              | H          | H                            | M            | H                                | L       | M                 | H                          |
| Allport             | H       | L                           | L      | M          | M                   | H                        | M        | L                                   | L                            | H                      | L              | H          | M                            | H            | L                                | H       | L                 | H                          |
| Murray              | H       | H                           | M      | L          | L                   | H                        | M        | H                                   | H                            | H                      | H              | M          | H                            | M            | M                                | H       | H                 | H                          |
| Sheldon             | L       | M                           | L      | L          | L                   | H                        | H        | L                                   | H                            | H                      | L              | H          | L                            | L            | L                                | M       | L                 | L                          |
| Eysenck             | L       | L                           | M      | L          | L                   | H                        | H        | L                                   | M                            | L                      | L              | L          | L                            | L            | L                                | M       | L                 | L                          |
| Cattell             | M       | M                           | H      | M          | H                   | H                        | H        | M                                   | M                            | L                      | L              | M          | L                            | H            | M                                | H       | L                 | H                          |
| Miller &<br>Dollard | L       | M                           | H      | M          | H                   | L                        | L        | H                                   | H                            | L                      | L              | L          | L                            | L            | M                                | M       | H                 | M                          |
| Angyal              | H       | M                           | L      | L          | M                   | H                        | M        | L                                   | H                            | H                      | M              | L          | H                            | H            | L                                | M       | L                 | L                          |
| Goldstein           | H       | L                           | L      | L          | M                   | L                        | M        | L                                   | L                            | H                      | M              | L          | H                            | H            | L                                | M       | L                 | L                          |
| Rogers              | H       | M                           | L      | L          | M                   | L                        | L        | L                                   | M                            | H                      | M              | M          | H                            | H            | M                                | L       | L                 | L                          |
| Murphy              | H       | M                           | H      | H          | H                   | H                        | H        | H                                   | H                            | H                      | H              | M          | M                            | M            | H                                | H       | H                 | H                          |
| Kretschmer          | L       | M                           | L      | L          | L                   | M                        | H        | L                                   | M                            | H                      | L              | H          | L                            | L            | L                                | H       | L                 | L                          |

Key : H high (emphasized). M moderate. L low (de-emphasized).  
 (註. Kretschmer は筆者が 附け加えたもの)

況相関的な行動様式を指す役割 role、などの概念がある。これらもまた、気質や体質は、character の下位概念であり、特性や役割は、personality の下位体系と考えれば整理できよう。

なお、最後に付け加えておきたいのは、一般に現代心理学の主流の中には Cantril の指摘する科学主義に根ざす偏見が著しく、したがってまた、ヨーロッパの性格学は、そのあらわな価値体系のために、とかく軽視されがちなことである。数量化や実験設備や質問紙を使用しないなどという旧大陸の伝統的な手法が、このような偏見をそそのものである。Eysenck の如きは、ヨーロッパの性格学は一種の哲学にすぎないので、科学的な研究とは認めがたいとまで極言している。

しかしながら、ひるがえって考えてみれば、現在アメリカのパーソナリティ研究の主役を占めるもののなかにも、その起源をヨーロッパに求めうるものがいくつかある。たとえば、精神分析学というまでもないし、内向・外向に初まる質問紙的研究も、その起源を Jung に負っている。あるいは、Rorschach テストは明らかにヨーロッパの現象学的方法に依拠している。こうみてくると、アメリカ心理学は旧大陸からの発想をより着実に実証研究の軌道にのせているだけだともいえよう。同時に、反面、その卑俗化をもさけることができないようでもある。たとえば、A. Einstein はいう。「問題の提起ということは、しばしば、それを解くということよりも本質的なものである。」<sup>(12)</sup> そうみてくるならば、アメリカ心理学は、その自負する如くひとり立ちをした「科学」であるのかどうか、改めて問われねばならないであろう。また、「科学主義」のスローガンが、自動的に研究を促進するものでもないことを、警戒し反省する必要があるだろう。

#### IV. 態度・意見とパーソナリティ

さて、態度 attitude あるいは意見 opinion もまた、術語としてはパーソナリティと同様、極めて曖昧な概念である。

たとえば G. W. Allport は、「態度とは、個人がかかわっているあらゆる対象や状況に対するその個人の反応に、指示的あるいは力動的な影響をおよぼす、経験により体制化された、心的・神経的な準備状態である。」としている。<sup>(13)</sup> Sherif や Cantril の定義もこれに近い。彼らによると、態度とは、特定の刺激や刺激状況に対して、人間が受動的あるいは中性的なしかたではなく、選択的・特徴的な方法で反応することを決定する機能的な準備状態 state of readiness である。それ故、態度とは全ての準備を意味するものではなく、次の5の特徴をもつ。つまり、常に主体・客体関係を含んでいること、後



天的に形成されたものであること、いろいろな程度の感情的性質を担っていること、ある程度持続すること、それが関係する刺激の数と種類との全領域にわたること。そうして、これらが、態度を他の準備 readiness——たとえば、算数を習得するための予備的知識や技能などと区別する。(14, 15)

このような定義は、何れもみな動的 dynamic な契機を含んでいることが注目されねばならない。つまり、後天的に習得されたものというからには、何らかの学習動因の存在がすでに予想されるし、あるいは、感情的色彩を態度に賦与することも、そのかげに潜在した動因を含意している。この立場をもっと極端に表明したものは、T. M. Newcomb であろう。(16)「動機づけられた人間とは、何かを選択している人間」であり、そこには、二つの部分が含まれる。つまり、第一に、動因とか要求と呼ばれる身体的エネルギーであり、第二に、選択的な環境の諸部分という言葉で表現される目標という概念である。つまり、動機とは一定の対象に向って集約されていくことを含意している。それは、制度的・社会的制約、一般に文化と呼ばれるものによって水路づけされていく。こうして「動機の相対的恒常性を特徴とする行動の系列」ができ上がれば、これを動機形式 motive pattern と呼ぶのである。つまり、動機形式とは、目標を達成し、ある動機が実現されるための具体的な行動手段を意味している。このような手段は、もちろん一定の広がりや幅をもつが、決して無制限ではない。たとえば、ルーズヴェルトを支持する動機をもつとしても、それを実現する手段にはいろいろある。ビラを配る、友人と論議する、投票する、雇い主の前では黙っている等が考えられるであろう。それらを包括する統合的傾向を態度と呼ぶ。つまり、態度とは動機を喚起する感受性を意味している。

態度と動機とは、上のように密接な関連をもってはいるが、しかし、次の二点で区別される。つまり、態度は現存する動因の状態を特徴とするのではなく、一定の動機を呼び起す可能性を意味するにすぎない。また、動機は態度よりも特殊であり、態度はより一般的である。

上のように、態度を動機という観点から基礎づけようとするアプローチは、いわゆる動的な立場である。ところで、L. W. Doob が指摘するように、態度の問題には、常に学習と認知という二つの契機が含まれている。(17) 動機という要因は、学習の側面を理解するためには比較的容易に導入しうるとしても、認知という側面の理解には必ずしも充分ではない。したがって、別に信念 belief という概念を導入し、これを態度と関係づけようとする立場をもみることができる。信念とは、個体が環境内の事物や事象に関して獲得した知識にもとづいて、その内部に形成される概念的な体制を意味している。W. Lippmann の説くように、我々はみてから信ずるのではなく、信ずるようみるのである。(18)

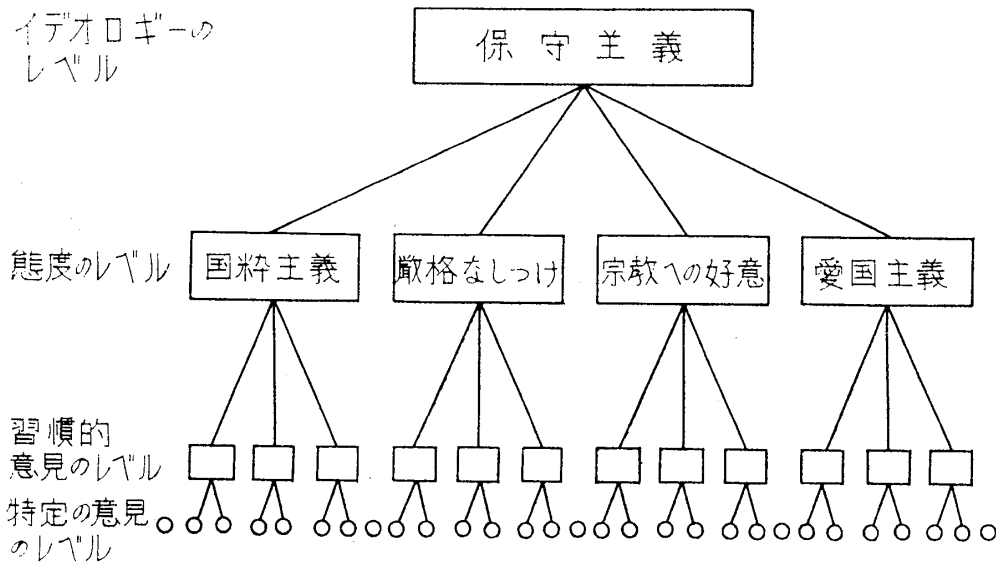
このような信念を態度の認知的側面とみなし、両者を分離しないという構想に立つのは、S. E. Asch である。(19) このような認知論的立場をとれば、態度は意見という概念と近似してくる。

一方、態度はまた、特性という概念とも近似している。たとえば、Allport は、態度は特性に較べると、より限定された関係対象をもち、より明瞭な方向性をもつという。ふだんはおとなしい人が、年長者に対して急に攻撃的になったとすれば、おとなしいということは特性であり、攻撃的な行動様式は態度である。(20) しかし、このような区別が、常に維持されるとは限らない。たとえば、内向・外向は通常特性と呼ばれるけれど、その始祖である C. G. Jung は、意識の態度という語を用いている。(21) このようなものは、態度といい、あるいは特性と呼んでも、何れにしても差し支えないように思われる。こんなところからも、態度とパーソナリティの両概念の密接な関連がうかがわれよう。このようにみえてくると、態度は、パーソナリティと意見・信念とを結ぶ媒介概念であるようにも思われる。そうして残された課題は、意見や信念とパーソナリティとの関連を、いかにして解明していくかという方法論的な志向にある。これについての諸研究の史的概観、および筆者のとり立場については、後続の論文に詳述したい。

ただし、大まかにみるならば、この問題についてもおよそ二つの立場がありうるようである。たとえば、J. S. Bruner らは、意見の研究において、次の四つの問題点を指摘している。(22) 第一は、意見がいかにして形成されるかという発生論的課題、第二に、意見は個人の適応にいかに関与するかという適応論的課題、第三は、他の心理学的機能や過程は意見といかなる関係をもつかという相関論的課題、第四に、意見がいかにして構成され体制化されるかという構造論的課題である。このうち 1、2、3 は何れもアメリカ的なパーソナリティ論の主要な課題であり、上の意見という用語をパーソナリティとおきかえてみても、ほとんど違和感を感じさせない。いいかえれば、このような意味での「意見とパーソナリティ」の研究は、明らかに動的な立場に立っている。

これに対して、H. J. Eysenck は次のような図式を提起している。(23) (次頁)

後にのべるように、この図式は、彼のパーソナリティ構造の図式と全く同様であり、両者の構造的平行性が暗に仮定されているようにみえる。しかも、彼のいうパーソナリティの一次元である内向・外向とは、遺伝的な規定性によって左右されるのだが、イデオロギーのレベルすら、そのような次元の反映であると考えられている。それは完全にパーソナリティの次元と対応するものではないが、少なくとも、何ほどの素質的因子を含むことになるであろう。このような発想には、旧大陸伝来の体質的な性格学の痕跡が根強く残されている。つまり、その静止的な成層理論や、素質因子の強調は、先の動的理論と対決する一



つの典型ともみられる。(Eysenck は、現代の科学主義者の旗手の一人とみられているのであるが、その学説は全て Kretschmer への批判から出発している。このプロセスは、やはり彼の現在の理論構成に反映したと考えられる。)

いずれにしろ、筆者はここでも、態度や意見の唯一妥当な定義を提出する意向は全くない。いいかえれば、この分野でも現状は混沌としており、それをいかに整理すべきかが、まず問題なのである。各人が各様に、意見、態度などの概念を規定するかぎり、そこには混同をさけられない。事実、社会的態度という名のもとになされている諸研究は態度を扱うとも意見を扱うとも、あるいは、イデオロギー、価値観、思想を扱うとも、何と呼ぼうが一向に差し支えないようにも思われる。そうして、近來、この分野は再び盛況に向いつつあるようでもある。S. Moscovici が指摘するように、社会心理学はかつては、態度の科学 science of attitude とみなされていた時期があった。それは一時とだえ、代って集団力学や認知やコミュニケーションの問題などがこの分野を占領していたが、いまや、態度研究は急速に復活しつつあるという。(24)

筆者の関心は別に態度の研究に指向されている訳ではない。一般に、思想、価値観、イデオロギー等と呼ばれるものについて、パーソナリティ論の立場からの接近を意図するのである。態度分野の研究は、その足がかりとなる意味がある。これらについては、稿を改めて論じたい。(終)

## 参 考 文 献

- (1) Winthrop, H. *Tender-Mindedness versus Tough-Mindedness in Psychology : A Reexamination*. Genet. Psychol. Monogr. 1956, Vol. 54, pp. 165-205.
- (2) Hall, C. S. & Lindzey, G. *Theories of Personality*. J. Wiley, N.Y. 1957.
- (3) Eysenck, H. J. *Sense and Nonsense in Psychology*. Penguin Books, London. 1957.
- (4) Allport, G. W. *Personality, A Psychological Interpretation*. Constable, N.Y. 1937.
- (5) Sullivan, H. S. *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. Norton, N. Y. 1953.
- (6) Ellenberger, H. F. "The Scope of Swiss Psychology". in David, H. P. & Bracken, H. (eds.) *Perspectives in Personality Theory*. Basic Books, N.Y. 1957.
- (7) Allport, G. W. "European and American Theories of Personality." in David, H. P. & Bracken, H. (eds.) *Perspectives in Personality Theory*. Basic Books, N.Y. 1957.
- (8) Kretschmer, E. 相場均訳「体格と性格」文光堂, 東京, 1960.  
(Kretschmer, E. *Körperbau und Charakter* 1955版)
- (9) Murray, H. A. "Historical Trends in Personality Research." in David, H. P. & Brengelmann, J. C. (eds.) *Perspectives in Personality Research*. Noble, N.Y. 1960.
- (10) Mckinnon, J. "The Structure of Personality." in Hunt, McV. (ed.) *Personality and The Behavior*. Disorders, Ronald, N.Y. 1944.
- (11) Cantril, H. 安田三郎訳「人間経験の謎」創元社, 東京, 1957.
- (12) Einstein, A. & Infeld, L. 石原純訳「物理学はいかに創られたか」岩波新書, 東京.
- (13) Allport, G. W. "Attitudes." in Murchison (ed.) *A Handbook of Social Psychology*.
- (14) Sherif, M. & Cantril, H. *The Psychology of 'Attitudes'* part I. Psychol. Rev. 1945, Vol. 52, pp. 295-319.
- (15) Sherif, M. & Cantril, H. *The Psychology of 'Attitudes'* part II. Psychol. Rev. 1946, Vol. 53, pp. 1-24.
- (16) Newcomb, T. M. 森東吾, 万成博訳「社会心理学」培風館, 東京, 1956.
- (17) Doob, L.W. *The Behaviour of Attitude*. Psychol. Rev. 1947, Vol. 54, pp. 135-156.
- (18) Lippmann, W. *Public Opinion*. Harcourt Brace, N.Y. 1922.
- (19) Asch, S.E. *Social Psychology*. Prentice Hall, N.Y. 1952.
- (20) 島田一男 "社会態度", 「心理学講座」第10巻, 中山書店, 1954.
- (21) Jung, C. G. 高橋義孝訳「人間のタイプ」日本教文社, 1957.
- (22) Bruner, J.S., Smith, M.B. & White, R.W. *Opinions and Personality*. Wiley, N.Y. 1956.
- (23) Eysenck, H.J. *The Psychology of Politics*. Kegan Paul, London, 1954.
- (24) Moscovici, S. *Attitudes and Opinions*. Ann. Rev. Psychol. 1963, Vol. 14, pp. 231-260.